

# 高島米峰と松下幸之助をめぐるラジオ

—昭和八年までを中心に—

坂本慎一

## 序

前回、「明治・大正期の新仏教運動と松下幸之助——境野黄洋と高島米峰の思想を中心に」（『論叢 松下幸之助』第3号、P.H.P.総合研究所、二〇〇五年）で松下幸之助の思想は、新仏教徒同志会の思想と非常に似ていることが確認された。幸之助が口にしてきた「物心一如」や「人間としての成功」などの言葉は、新仏教徒同志会が世に広めたものであり、仏教的世界観による近代資本主義の肯定は、新仏教が先鞭をつけた思想であった。幸之助の思想は、新仏教以降の思想的流れを汲んでいると解釈することができる。

両者の具体的接点はいくつか考えられるが、最も確実なものとして初期のラジオ放送がある。高島米峰を筆頭に新仏教徒同志会のメンバーは頻繁にラジオに出演し、全国的な社会教育に従事していた。幸之助は、最初期からラジオに接しており、後には受信機の製造・販売に従事することでラジオ業界と強い関わりを持つに至った。幸之助は、ラジオ放送によって米峰の影響を受けたと考えられる。<sup>1)</sup>

また、新仏教とは別に、幸之助がラジオから影響を受けたと思われる

る思想もある。それは、昭和七（一九三二）年に幸之助が述べた「産業人の使命」である。これは、当時ラジオ関係者が異口同音に主張していた「ラヂオの使命」が淵源ではないか。ラジオ受信契約者の百万人突破を機に更に盛んに叫ばれた「ラヂオの使命」は、時期的にも幸之助が「産業人の使命」を述べた時と一致する。

幸之助は、自分の事業について「最初は食うためにやった」と言っている。船場商法を幼い頃からの修業で身につけた幸之助は、最初はその経験を生かして「食うために」会社を興し、事業を拡大して行った。しかし、「商売してから十四年ほど」で「一つの使命感」を感じるようになったと言っている。幸之助には、三十代である種の思想的变化があった。本稿は、この変化こそ彼がラジオと関わるようになったことが大きな要因であるという仮説を提示したい。

本稿では、新仏教徒同志会の中心人物であった米峰と、幸之助が如何にラジオと関わったか、その詳細を探る。主に時系列的に詳細を追いつつ、その思想的意義について分析し、幸之助がどのようにラジオから影響を受けたのか議論して行きたい。

（書誌学的に見た場合、「高島米峰」は、昭和一二（一九三七）年頃、「高島」から「高嶋」に姓が変わっている。詳細は未詳であるが、本

稿では便宜上昭和一一（一九三六）年までを「高島」とし、以後を「高嶋」としたい。<sup>4</sup>

## I ラジオ放送の開始―昭和三年頃まで

### 1 最初期ラジオと松下幸之助

大正九（一九二〇）年二月、イギリスでラジオの実験放送が開始され、同年一月にはアメリカで世界初の正式なラジオ放送が開始された。『東京放送局沿革史』によると、日本では大正二〇（一九二二）年に本堂平四郎が民間最初の試みとして無線実験を行ない、大正一一（一九二二）年頃から、東京日日新聞などが無線電話の公開実験を行なってラジオや無線の普及に努めていた。<sup>5</sup>

松下幸之助は、ラジオとの出会いを次のように証言している。

私をはじめてラジオ放送というものを聞いたのは、関東大震災の前の年、つまり大正十一年ごろではなかったかと思う。

それまで、新聞や雑誌などで、ラジオ放送というものの解説などを読み、こんなふうにしてラジオというものは聞けるのだということを、知識としてはある程度持っていたけれど、実際に自分のこの耳でラジオの声を聞いた時の感動というものは大げさに言えば胸のつまるほどのものであった。<sup>6</sup>

幸之助は続けて、「キリシタンバテレンの法みたいだ」と当時の驚

きについて述べ、また「こういうものをつくってみたいナと考えたことを、今もおぼえている」と証言している。

『東京放送局沿革史』には、大正一一（一九二二）年の時点で、大阪における無線の公開実験があったとは記されていない。幸之助の記憶が確かならば、彼は東京へ出張に行った際にラジオに接していたのだろうか。『大阪放送局沿革史』によると、大正一一（一九二二）年に、ラジオ放送に関して「各地より続々出願者が出てきた」とあるの<sup>7</sup>で、あるいは、今日記録には残っていないが大阪でも有志が既に活発な活動をしていたのかも知れない。後に、東京、大阪、名古屋の放送局を合一して日本放送協会を作る時、大阪はあくまで民間放送とすることにこだわったことから考えても、大阪では早い段階から民間におけるラジオの関心は高かったようである。<sup>8</sup>

いずれにせよ、幸之助がラジオに接したのは、東京放送局が「仮放送」を開始する大正一四（一九二五）年よりも早く、実験や啓蒙が行なわれていた段階だった。また、この段階で既にラジオの製作や販売に意欲があった。

### 2 最初期ラジオと高島米峰

高島米峰は、自身の証言によると東京放送局が社団法人として「社員」を募集していたのを当時知っていた。<sup>9</sup>「社員」になれば、永久に聴取料を払わなくてよい規則になっていたが、当時としては大金である一〇〇円を納めなければならなかったので断念したと米峰は後に述べている。

大正一四（一九二五）年の三月二二日に東京芝浦の東京高等工芸学校の放送所から「仮放送」が開始されるが、三月の下旬には米峰へ出演の依頼があった。どのような経緯で出演依頼があったのかは不明だが、顔の広い米峰だったので、東京放送局にも知り合いがいたのかも知れない。彼は四月の下旬に「日本文化の淵源」と題して、自らが信じる宗教観について述べた。米峰は後にこの放送を「私の処女放送であって、それは実に、日本に於ける最初の宗教放送であった」と回顧している<sup>10</sup>。米峰は、「社員」でこそなかったものの、ほぼ最初からラジオ放送に関わっていたと考えられる。

同年七月一二日には東京放送局が愛宕山へ移転し、本放送が開始された。前の月には『日刊ラヂオ新聞』が創刊され、七月には月刊誌『ラヂオの日本』が創刊になっている。『ラヂオの日本』は社団法人日本ラヂオ協会が発行していたが、この団体はラジオの啓蒙を主な目的として設立されたものであった。ラジオ業界を盛り上げようと、さまざまなメディアや団体が成立していったのである。

米峰は、大正一五（一九二六）年一月二二日、「青年は人生の花」というラジオ演説を行なっている。また、同年三月二二日、放送開始一周年記念講演会の最初の講演者として小田原で「日本文化の淵源」を再度話した<sup>11</sup>。これは複数の人による連続講演の一部であった。彼は次の日にもラジオに出演し、女性差別反対を訴える演説を行ない、七月一五日には「私は馬であります」という放送をして動物保護を訴えた<sup>12</sup>。

この頃最も反響を呼んだ放送の一つとして、日本放送協会発行の

『日本放送史』（昭和二六（一九五二）年）は「高島米峰氏の『ひのえ午の迷信』という講演も反響を呼び、多数の感謝状が放送局に届いた」と紹介している<sup>13</sup>。この放送はひのえうま生まれの娘を差別するのは迷信だと批判する内容で、井上円了の弟子らしい「迷信の打破」の一環であった。米峰本人はこのラジオ講演を「昭和元年か二年頃のこと」とし、題を「丙午生れの娘さん達に」と言っている。反響については、次のように述べている。

この「丙午娘」の放送の時は、余り反響の多かったのに、喫驚した。しかもその手紙といふのが、どれもこれも感激感激で、「毎日憂鬱に暮して居た娘が急に朗に笑ふようになりました」とか「陰惨な家庭が、明朗になりました」とかいふ類のもので僕も実に満足を覚えたのである。

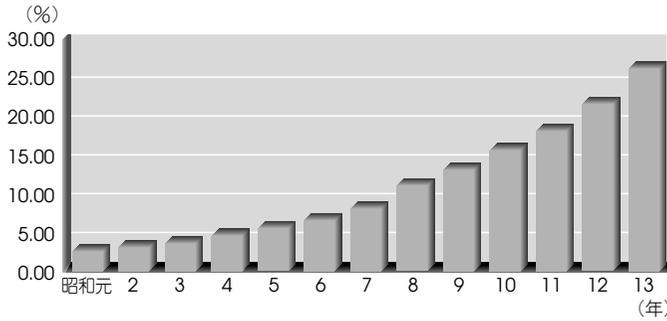
この頃はまだ放送局は東京と大阪と名古屋の三ヶ所だけで、しかも、それぞれ独立して居て全国中継などといふことが、出来なかつたので、僕のこの「丙午娘」の放送が評判になつたので、わざわざ大阪放送局と名古屋放送局とへ出かけて、同じ話を繰り返したのであるが、どこの放送も、非常な反響で、感激の手紙が、机上に、山を成すといふ有様<sup>14</sup>。

米峰は感謝の印として聴取者から贈り物を多数受け取ったと述べている。正しい宗教を信じる「正信」と、人生を害する「迷信」の区別を主張する米峰の思想は、最初期のラジオ放送から電波に乗せられて

表1 ラジオ受信機普及状況

	東京	大阪	愛知	全国
大正15年3月末	14.8%	6.9%	4.6%	2.2%
昭和3年3月末	18.7%	9.3%	7.4%	3.2%
昭和8年3月末	37.0%	28.0%	16.8%	11.2%
昭和12年3月末	58.9%	41.4%	30.4%	21.4%

図1 全国ラジオ受信機普及率



松田儀一郎編纂・発行『日本放送協会史』(1939年)316~318頁より作成

聴取者へ届いていた。<sup>17)</sup>  
 東京、大阪、名古屋の放送局は、大正一五(一九二六)年八月二〇日には解散となり、公益社団法人日本放送協会が設立された。翌年の五月から六月にかけて、熊本、広島、仙台、札幌にも支部が設立され、昭和三(一九二八)年一月には全国放送網が完成する。しかし受信機の普及はまだわずかで、大正一五年三月末における東京の受信機普

及率は一四・八%、大阪で六・九%、愛知で四・六%、全国ではわずか二・二%であった(表1、図1参照)。松下幸之助はこの頃既にラジオを聞いていたと思われるが、大多数の庶民にとって、ラジオはまだ縁の薄いものであった。

### 3 放送内容とその思想

最初のラジオ放送は、今のように連続したのではなく、昼間は休止時間が多かった(表2参照)。民間放送はまだ存在せず、今言うNHK第一放送だけであった。

放送内容は、『日本放送協会史』によると、「当時は電波の到達範囲も狭く、聴取者も少数の人に限られ且つ番組の編成も先づラジオに対する社会大衆の興味を喚起することに重点が置かれ、従って、演芸、音楽等が放送番組の首位を占めてゐた」という。後の統計では、大正一四(一九二五)年度の放送は、内容別に見ると教養が三四%、慰安(娯楽)が三九%、報道が二七%となっている。最初のうちは珍しいものが重視され、大阪放送では大正一五(一九二六)年元旦の朝一〇時に「これから鶯を啼かせます」と言つてウグイスの鳴き声だけを放送した。<sup>21)</sup> 別な日には「只今より時鳥の鳴合せを放送します」と言ったが、時間内にホトトギスが全く鳴かず、聴取者から苦情の手紙をもらったこともあった。<sup>22)</sup> しかし、こうした珍しいだけの内容はすぐに飽きられ、大正一五年の段階で「ラデオは既に山が見へた」と言う人もいた。ラジオは当初、受信機が贅沢品と見なされたり、出演を嫌がる人も多かった。<sup>23)</sup>

大正15年東京放送局時刻表（平日）

放送時間	放送内容
9:00—9:05	天気予報
9:05—9:10	株式
9:30—9:35	株式・商品
9:45—9:50	料理献立
9:50—10:00	日用品物価
10:30—10:40	商品・株式
10:45—11:15	家庭講座
11:30	時報
11:30—11:40	株式・商品
11:55—12:00	株式
12:10—12:40	昼間演奏
12:45—13:00	ニュース
13:30—13:40	株式・商品
13:45—14:15	婦人講座
14:30—14:40	商品・株式
14:45—14:50	地方天気予報
15:30—15:40	商品・株式
15:55—16:00	株式
16:00—16:30	子供の時間
17:00—17:10	株式
18:30—19:00	英語講座
19:10—19:25	ニュース
19:25—	講演・音楽
21:30—	時報・天気予報

大正15年大阪放送局時刻表（平日）

放送時間	放送内容
8:32—8:35	米穀・株式
9:00—9:05	米穀・株式
9:15—9:20	米穀・株式
9:35—9:45	株式・綿糸・国債ほか
9:55—10:5	米穀・株式
10:10—10:20	料理献立・物価
10:25—10:30	米穀・株式
10:45—10:50	株式・綿糸・国債ほか
11:00—11:05	米穀・株式
11:30—11:35	米穀・株式
11:45—11:50	天気予報・株式
12:10—12:35	音楽・講演
12:40—13:10	講演・音楽
13:30—13:35	米穀・株式・国債
13:45—13:50	米穀・株式・国債
14:05—14:10	米穀・株式・国債
14:30—14:35	米穀・株式・国債
14:45—14:50	米穀・株式・国債
15:00—15:05	米穀・株式・国債
15:10—15:15	米穀・株式・国債
15:20—15:30	ニュース・各市場
15:40—16:10	講演・音楽
18:30—19:00	音楽・講演
19:00—19:30	講演・音楽
19:30—21:30	ニュース・講演・音楽
21:30	公知宣伝・天気予報・時報

表2 日本ラヂオ協会「ラヂオの日本」3巻（1926年）44頁より作成

当時、東京放送局で番組編成を担当していた矢部健次郎は、「番組編成の机から」と題する論文で、「プログラムが行詰った、と云ふ批難はもう出すものがないからと云ふ解釈の上からすれば甘受する外はなからう」と言っている。しかし「そんな軽薄な考へは寧ろ棄てて欲しいと思ふ。奇を衒ふやり方よりも実質を尚ぶやり方を買って貰ひたい」と述べていた。矢部は、この「実質」という観点で見れば「世界無類のプログラムを、我が日本の放送局当事者は、毎日編成発表しつつある」と主張していた。これは、日本の文化が和洋を折衷したものであるから、放送内容もそれに準じて「世界無類」の内容になっているという主張である。矢部は放送を通じて高島米峰とも懇意にしていたが、物珍しい放送よりも米峰の講演のような放送を重視していた<sup>26</sup>うであった。『日本放送史』もこの頃の推移について「放送の珍しい時代、楽しみの時代というのが過ぎて実用化して来た」と述べている<sup>27</sup>。

少し後の昭和四（一九二九）年に、米峰も「放送プログラムが行詰ったといふことをよく耳に致しますが、しかし自分は決してそのやうには考へて居りません」と言っている。更に「放送局に対してプログラムについて、とやかく文句をいふ人は、考へように依つては、プログラムに対する不満といふよりも、放送事業に対する或る興味を有する人ともいへるのでして、これは大いに研究すべきことと思ひます」と述べている。米峰は単に依頼されて出演するだけではなく、プログラムの編成についても建設的な意見を言っていたようである。彼は「ラジオをして、何かしら、大衆に向つて呼びかけるあるものがほしい」と主張していた。

『大阪放送局沿革史』によると、放送局ができる前、放送権をめくって民間人同士が激しく争ったために、時の通信大臣である犬養毅が放送局を民間企業として許可せず、公益社団法人とした。<sup>29</sup>その後、三放送局が解散して日本放送協会が設立される時も、大阪放送局は再度民営論を主張したが認められなかった。<sup>30</sup>放送はあくまで公共のものであり、公益を追求するものとされたのである。

大正一五（一九二六）年、日本放送協会が設立される際、東京放送局は「声明書」を発表し、今後の放送は「ラヂオの使命を完からしむるに努むべし」と主張した。<sup>31</sup>

翌昭和二（一九二七）年、東京中央放送局社会教育課長であった仲木貞一は、「ラヂオの教育的価値に就て」という論文を書き、教育、報道、娯楽のうち、当時の放送では教育が四割七分を占めるとしていた。仲木は、目であっさり見たものはすぐに忘れてしまうが、耳で聞いて想像したものはなかなか忘れないと言い、ラヂオの教育的価値を強調していた。昭和五（一九三〇）年には日本放送協会常務理事の小森七郎が「放送の常道」という論文で、放送事業とは「社会大衆の文化向上と福利増進を目標とする」べきだと主張し、「聴取者も今少しく講演講座なり報道なりの内容を味って智的糧を吸収することに努力すべき」と説いた。ラヂオ受信機を作る業者に対しては、「放送当事者、聴取者と共存共栄の精神を汲んで放送事業の発達に尽して貰ひたい」と言っている。また、当時の東京中央放送局の意見として「学校なるものにあこがれ過ぎる弊風を破るために、教養機関としてラヂオを一層よく働かせて行きたい」という考えもあった。<sup>34</sup>

最初の三放送局が社団法人として設立されたことから、「ラヂオの使命」は、初めから存在していたようであり、日本放送協会設立後になるとこれが一層強調されるようになる。一時は珍しさに引きずられたが、数年の後には放送内容も軌道に乗ったと見て良いであろう。<sup>35</sup>ここに米峰のみならず、米峰の同朋が活躍する余地もあった。

## II ラヂオ放送の展開と受信機の発達

### 1 高島米峰とラヂオ放送

高島米峰が昭和初期のラヂオ放送界で重視されていたことを物語る決定的な放送が二回ある。一回目は、昭和三（一九二八）年九月二八日であり、東京放送はこの日「秩父宮御婚儀奉祝放送」を行なった。この一環として、米峰は家庭講座「竹の園生の彌樂」という講演を行なった。この放送は当日『日刊ラヂオ新聞』で内容があらかじめ予告され、講演の全文を米峰の書である『信ずる力』<sup>36</sup>で見ることができた。

この奉祝放送は、秩父宮雍仁と松平勢津子の結婚を祝つての放送であったが、最初に君が代を赤坂小学校の生徒が歌い、次に米峰が講演を行なっている。秩父宮雍仁は大正天皇の第二皇男子であり、戦前における宮家であるから、放送に間違いがあれば放送協会全体の問題となる恐れもあった。そのなかで学位も爵位もない米峰が、この日の最初の演説を任されたのである。

内容は、秩父宮と松平勢津子を紹介した後、日本国民はこの結婚を手本として正しい結婚を心がけるべきだと主張している。それは第一

に法律に則った結婚であるべきで、第二に道徳に則った結婚である。このたびの結婚を祝うということは、今日だけ喜ばば良いことではなく、正しい結婚のあり方をこれからも常に忘れないことだと主張した。米峰にとっては得意分野である道徳の啓蒙と結びつけてこの演説を結んでいる。

演説は午前一〇時四〇分から放送され、何分間かは不明だが、東京ローカルで放送された。言葉づかいは宮家に相応しい敬語を巧みに用い、話の流れも見事であったと言って良い。他には、秩父宮が歩兵第三聯隊に従軍していた時の上官であった永田鐵山・陸軍歩兵大佐も、午後七時二五分から「武人としての秩父宮殿下」という講演を行なった。<sup>(38)</sup>

米峰が重視されていたことが分かる二回目の例は、昭和四（一九二九）年二月三日である。この時皇后の父に当たる久邇宮邦彦が亡くなったので、米峰は「久邇宮殿下の御成徳を偲び奉る」という記念講演を行なった。午後七時二五分から、今度は全国で放送された。やはりあらかじめ主な内容は『日刊ラヂオ新聞』で予告され、講演の全文は『信する力』に掲載されている。<sup>(39)</sup>

久邇宮は米峰も個人的に懇意にしていたようであり、「聖徳太子奉賛会の関係で、総裁にあらせられた殿下から幾度か拝謁の栄を賜はつて」いたと言っている。聖徳太子は明治の廃仏毀釈以降、余り尊敬されていなかったが、米峰等は久邇宮と共にこの名誉回復に努めたのであった。米峰は次のように言っている。

元来、聖徳太子の御鴻業は、単に仏教徒だけが私すべきものでなく、日本国家全体の上から国民挙つて感謝すべきことであるにも拘らず、従来、一部偏狭なる学者思想家の中には、ややもすれば太子の御鴻業について十分なる尊敬を捧ぐるに吝なるものも少くはなかつたのでありますが、晩近に至りまして、太子に対する正しい理解が上下に徹底して、奉讃の声全国に響き渡るといふやうになりましたのは、誠に、故宮殿下御成徳の然らしむるところであると申さなければなりません。<sup>(40)</sup>

米峰はこの講演の最後に、『日本書紀』における聖徳太子薨去の記述を引いて、久邇宮薨去の悲しみもこれと同じだと締めくくっている。久邇宮との思い出を語りながら、持論をうまく組み合わせる手法は、秩父宮の奉祝放送とよく似ている。<sup>(41)</sup>

米峰はその後、「何百回」とマイクの前に立った。一回の放送が今日よりずっと重く受け止められた当時において、米峰は宗教放送のパイオニアであり、宮家の冠婚葬祭放送に抜擢されるほどの人物だったのである。聴取者はまだ少なかったが、聴取している者にとって、米峰の存在は非常に大きかったことが想像される。当時、日本放送協会常任監事だった矢部健次郎は米峰の死後に、次のように回顧している。

私は放送協会に入ってから、高嶋さんの知遇を受けるようになったのだが、講演には随分度度お願ひしたし、年末には其年の結びとして、各方面の批評を、高嶋さんにお願ひするのが恒例となつ

て居た。番組編成会議の席上、今年には誰か外の人にと人選をするのだが結局は帯に短したすきに長しで、高嶋さんに落ちつくのが常であった。ラジオ講演者としては下村海南、永田青嵐氏等と共に、稀れな名手であった。

日本放送協会における米峰の信頼は、絶大だったようである。

更に米峰は出演者としてだけでなく、放送協会へ出演者を斡旋する役割も果たした。自身の証言であるが、昭和初期の頃放送協会の講演依頼の担当者であった道満謹吾が、一週間に一度は講演者を誰にするか米峰のところへ相談に来たという。どうしても他に都合がつかない時は米峰が急遽マイクの前に立ったと回顧しており、これは矢部の証言ともよく似ている。

米峰が放送協会に紹介したと思われる人物として、新仏教徒同志会のメンバーが挙げられる。境野黄洋は、昭和六（一九三一）年頃、日曜日朝一〇時の宗教講演の講師として、米峰と共に名が挙がっており、昭和六年九月二日から二六日に仙台放送で仏教講座「妙法蓮華教譬喩品第三」を放送した。また昭和七（一九三二）年九月三日には、境野は「彼岸の教理」という放送を行なっている。境野と米峰は同じ哲学館の出身であり、新仏教徒同志会の最初期からの幹部として公私共に懇意にした間柄であった。

また同じく新仏教徒同志会のメンバーとして活躍した加藤咄堂も、大正一四（一九二五）年二月二七日という早い段階で、既にラジオに出演している。昭和七（一九三二）年四月一日には「聖徳太子と

日本精神」と題する講演を行なっており、昭和八（一九三三）年八月八日から一四日まで朝に「涼心禅話」という放送を行なっている。また翌昭和九（一九三四）年七月一六日から三十一日まで一四回にわたって「菜根譚講話」を放送し、その内容は単行本化された。

高島平三郎も新仏教徒同志会のメンバーであったが、やはり大正一四（一九二五）年の一〇月五日、一二月一日という早い段階でマイクの前に立った。後にも、昭和七（一九三二）年五月一七日から「家庭に於る子女の教育」という連続講演を行なっている。同様にメンバーであった伊藤證信も、昭和八（一九三三）年八月一五日から九月六日まで、名古屋放送で哲学の連続講演を行なった。また新仏教徒同志会のメンバーか確定はできないが、雑誌『新仏教』の頃から米峰が懇意にしていた講師である伊藤痴遊（初代）も、大正一四（一九二五）年一〇月一六日にはラジオに出演しており、昭和七（一九三二）年二月一八日にもラジオ出演が確認できるので、あるいは米峰が出演を斡旋したのかも知れない。

恐らく、今日記録に残っていないものも含めて、新仏教徒同志会のメンバーによるラジオ出演は、米峰を除いても優に百回を超えるのではないか。

米峰は出演者として、また人材の斡旋者として初期の日本放送協会に多大な貢献をしたのであった。当時の放送を聞く者にとって、米峰の思想を学ぶ機会には十分と言えよう。

## 2 ラジオ受信機と懸賞募集

日本放送協会は当初、真空管ラジオの発達をそれほど期待せず、鉱石ラジオで聞ける範囲を如何に広げるか考えていた。鉱石ラジオは真空管ラジオと違って電源が不要で音が良かったが、放送局から近い距離でしか聞けなかったのである。如何に放送局を増やすかということは、当時「鉱石化」と呼ばれ、「ラヂオの使命」を遂行するためにも、全国の「鉱石化」が重要な課題とされていた。

当時のラジオは真空管式はもとより、鉱石式も非常に故障が多いものだった。東京中央放送局は昭和三（一九二八）年に「ラヂオの受信機——と云ふと一部の人には直ぐ『故障の多いもの』といふ連想を喚ぶ位に（然し一方には微妙な精巧などいふ感じを否定はせぬが）繊弱な、毀れ易いもの、素人の触るべからざるものといふ風に一般には考へられて来てゐるやうに思はれる」と言っている。この時東京中央放送局が調査したところによると、鉱石式の故障の場合、原因の五二%が鉱石不良、次いで配線工作不良が一七%、同調不良が一〇%、誤接続が一〇%となっている。このうち配線工作不良とは、「ネジの締め方が緩かったりするもの」であった。また真空管式の場合、故障の原因トップは「トランス切断」で三八%であり、これはオーディオトランスのコイル切断のこのようなものである。次いで誤接続が一二%、配線工作不良が一二%、ソケット不良が七%、接続断線が六%となっている。受信機とスピーカーの部分の故障では、原因の四一%がコイル切断、三五%がコード不良となっている。鉱石ラジオの場合はまず鉱石

を取り換えてみるべきで、他はコイルやコードの切断を疑ってみるべきだと東京中央放送局は言っている。

日本ラヂオ協会も同じ年、「最近聴取者は、一見飽和状態、否、時に減少をさへ見る有様であるが、……その原因を探求すれば受信機の不完全が最大原因である」と言っている。また「不良品の横行が如何にラヂオ界に悪影響を与ふる素因となり、発展を阻害するパチルスであったか」とも主張し、信頼のおける受信機が普及することを願っていた。

松下幸之助もラヂオ業界に参入した動機について、次のように語っていた。

ラジオの故障が多いことは当時の常識になっており、運送中にも故障が続出するという事はしばしば聞いていたところであるが、現実に関心した放送が目のあたり聞けないとなると、たとえそれが常識になっていた事柄であっても無性に腹立たしく、こんなことではだめだ、こんなバカなことがあるものかという気持ちになるとともに、ラジオはそう簡単に故障など起きるような複雑なものではない、という気がしきりにするのであった。

幸之助も最初期からラジオを聞いていて、受信機の故障の多さには聴取者として困っていた。故障の少ないラジオを作ることは、幸之助にとっても悲願であった。

日本放送協会としても、手をこまねいているわけにはいかず、不良

品の横行を避けるため、昭和三（一九二八）年四月二四日にラジオ機器の認定制度を開始した。日本ラヂオ協会は、日本放送協会の委嘱により、その企画査定標準を立案した。<sup>67</sup> 認定された機器には認定マークを付け、不良品が横行することを避けようとしたのである。

また、受信機の懸賞募集を行なってラジオ製作者の士気を高めることも、当時において重要な方策であった。恐らく最初の懸賞募集は、大正一五（一九二六）年春、大阪市で開かれた電機大博覧会が、自作受信機の懸賞募集を行なった時だと思われる。審査は日本ラヂオ協会が担当し、締め切りの四月二〇日までに応募された受信機は五四点であった。鉱石式と真空管式は別々に評価の対象とされ、それぞれ一等から三等まで入賞者が決められた。しかし、この懸賞について日本ラヂオ協会は「応募数は予期したところより少く、また成績の特に優秀にして所謂会心の作といったもの無かったことは聊か失望の感がないでもない<sup>68</sup>」と言っており、「二位のものを一等とし次位のものを二等とせるに過ぎないので、一等のものが必ずしも一等の実質ありといふ意味でないことを附言して置く<sup>69</sup>」としている。この時点では、製作者の技術もまだ十分なものではなかった。

これに刺激されてか、昭和二（一九二七）年から翌年にかけて東京中央放送局は「高声機用家庭向きの受信機<sup>69</sup>」の懸賞募集を行なった。応募総数は一四三個であったから、大阪のものよりも大規模である。同年四月に開催された大電力放送記念「ラヂオ展覧会」で、審査結果と共に応募作品が展示されたようである。

更に昭和四（一九二九）年一二月、東京中央放送局は一般家庭用の

エリミネーター受信機を募集した。<sup>70</sup> エリミネーターとは交流電源によるものだが、電池式は電池の交換が面倒だったため、エリミネーターの普及こそ「ラジオ普及の鍵<sup>71</sup>」とされていたのである。この頃には、受信可能範囲が狭い鉱石式は敬遠されるようになり、真空管式に対する信頼もかなり増してきた。また交流電源によって十分な音量も確保できるようになった。この懸賞も翌年三月末から開催の展覧会で受賞作品を公開するものだった。

この募集に一等当選したのが、田辺商店のコンドル受信機であり、田辺商店は『ラヂオの日本』に広告を載せて、この受賞作を大々的に売り出した。後に松下電器も一等当選した試作品を商品化するが、この手法は田辺商店が先駆である。

懸賞によって受賞者に栄誉を与えてラジオ製作者の士気を高め、ラジオについての理解を広めることが日本放送協会の目的だったが、これは受信機に限らず、他のことにも応用されている。この頃の日本放送協会は懸賞募集を盛んに行なっており、ラジオドラマの脚本や童謡<sup>72</sup> ラジオ体操の歌<sup>73</sup>、日本放送協会のマーク図案や「ラヂオ風景<sup>74</sup>」といったものまで、考えられるものは何でも懸賞にして一般公募したようである。ラジオ受信機の公募は、そのなかでも花形の懸賞だったと考えられる。

### 3 昭和六年のラジオ受信機懸賞募集

昭和六（一九三一）年四月、東京中央放送局で第二放送が開始された。当時はこれを「二重放送」と呼び、第二放送は今日のNHK第二

放送と同じく主に教育番組が放送された。これを機に、東京中央放送局は同年の『ラヂオの日本』六月号でエリミネーター受信機の懸賞募集を行ない、「一般の家庭用」と「二重放送用」をその条件とした。<sup>(76)</sup> 賞金総額は二千元で、応募の第一条件として真空管の数を二つまで（整流球を加えて三つまで）と限定したことが特徴である。東京中央放送局の大野煥平は、「今回の懸賞受信機は二球と制限されてゐる点が、従来の方と大いに異っている」と言っている。真空管の数を限定したのは価格を抑えるためだと思われ、それほど高性能ではなくとも都市部の家庭で十分に使える安価な受信機を求めたのである。

この募集はこれまでより更に本腰を入れたものであり、昭和六（一九三二）年『ラヂオの日本』八月号では、「家庭用の受信機はどんなものが良いか」という特集を組み、二五人の有識者に理想とするラジオについて意見を求めている。<sup>(78)</sup> 理想の家庭用受信機として、多くの識者が故障が起きないことと価格が安いことを条件として挙げている。

懸賞の後一年の間にミゼット式（小型）の二球が国産ラジオの主流になるが、これについて『昭和八年ラヂオ年鑑』は次のように説明している。

一般に二球乃至四球程度のものが多いのは、我国放送施設が欧米諸国の夫に比して多少趣を異にし、一つの統一せられた協会によつて行はれ、放送の主なるものは全国中継によつて行なはれる關係上、地方局を排して遠方局の聴取をする必要の少い事と又海外諸国に於けるが如く隣接国の聴取に便ならざる關係上對外受信

の発達してゐない事及び国民の経済的事情による為であらう。<sup>(79)</sup>

アメリカの放送局は全て民営であったが、その分統一性がなく、さまざまな放送を聞こうと思えば、七、八球のスーパーヘテロダイニング式による高級ラジオで遠方の放送局の電波を受信する必要があった。最初から公益社団法人による放送だった日本では、全国中継も発達したので、小型受信機が主流になったのである。

松下電器では、この頃既に松下幸之助の提案でラジオの販売を行なっていた。最初は他社のラジオを松下電器の販売網で売っていたが、故障が多いために自社生産に踏み出したと幸之助は後に回顧している。<sup>(80)</sup> 幸之助は、自社生産に当たって、当時の研究部主任であった中尾哲二郎を説得した。中尾は最初、自信がなかったという。東京中央放送局によるラジオ受信機懸賞の公募が行なわれたのは、ちょうどその時だった。応募へのいきさつについて中尾は、次のように述べている。

J O A K（東京中央放送局―引用者）としては、そういうこと（「故障」のない「3球で完全な受信機」という設計の募集があった。その広告を見た時に「これはおもしろい、腕だめしにもなる。これに応募してみようじゃないか」ということで皆と相談したら『やりましょう』というわけだ。それで松下相談役のところへ行つて『実はこういう募集をしている。これに応募しようと思ふのですが、どうですか』と聞いた。すると松下相談役が『君、それ1等に当選する自信があるか』と言われる。『ない』とも言

えないので『あります』と言った。『それだったらやれや』ということで、今度はそれに全精力を集中してやったわけです。<sup>81</sup>

最初は自社生産すら渋った中尾だが、生産すると決まれば今度は懸賞の応募に自信を示した。中尾は、最後の一週間は家に帰らないで製作に没頭したと回顧している。当時の松下電器の研究部は一〇人もいない小規模で、専門学校を出た技術者も西村真二郎と吉田正一の二人だけだった。締め切り間際に二台が完成し、中尾が直接東京へ持って行った。

当時、愛知発明協会も二球式の受信機を懸賞募集していた。<sup>82</sup> 図らずも、同じような懸賞募集がほとんど同時期に行なわれることになった。松下電器は、こちらの懸賞に応募した様子はない。公募を知らなかったのか、興味がなかったのかは不明である。

東京中央放送局の公募は昭和六（一九三一）年八月末日締め切りまでに、一一八人が一六七台を出品した。<sup>83</sup> 大阪からは六人一〇台が出品され、二台提出した者は全国で二二人だった。「出品者種別」として「ラヂオ業者」「技術者」「アマチュア」の区分があったが、恐らく松下電器は「ラヂオ業者」に分類されたと思われる、「ラヂオ業者」の出品は四七人九六台だった。地方別では、広島や熊本からも応募した人がいた。

審査結果は同年一月二日に発表された。<sup>84</sup> 同年の『ラヂオの日本』一二月号に、審査結果の詳細が掲載されている。<sup>85</sup> 募集では一等は五名の予定だったが、実際はのべ四名が当選した。松下電器の受信機は中

尾の名ではなく「松下幸之助」の名で出品され、一般用の一台が一等当選となっている。他には田辺商店の原愛次郎が二重放送用と一般用の二つを一等当選させており、もう一人は日本無線電信電話株式会社の加納与四郎で、二重放送用が一等となっている。二等は募集の段階では五名の予定だったが、四名当選であり、ほかに等外優良賞が一名であった。松下電器が出品したもう一台は落選したようである。

松下電器が出品した「一般用グリッド検波・低周波一段増幅・高声機附受信機」について、審査結果は次のように評価している。

このセットは高声機附金属ケース、検波管二二七電磁再生で、増幅管は二二六。特長は、再生コイルが可なりによい状態で固定されてビートを起すことなく、然も充分の音量があつて、ハムや雑音がない事と、調整がただ同調蓄電器一つだけで頗る容易に且つ、<sup>86</sup> 氣持よく扱はれる事である。慾を云へば、形ちを今少し小さく、周波数特性を今少し改善したい事である。<sup>87</sup>

中尾のもとには、この知らせは電報で届いた。<sup>87</sup> 中尾も大いに喜んだようである。授賞式には中尾が「松下幸之助氏代理」として出席した。<sup>88</sup> 中尾は受賞後に「東京中央放送局の懸賞で一等に当選した弊所の受信機」と題して論文を書いている。<sup>89</sup> 論文によれば、この受信機は「故障絶無と自信し得る」もので「女子でも安定且つ確実に操作出来る」と<sup>90</sup> 特長であった。ここに幸之助の悲願でもあった「故障絶無」のラヂオが誕生したのである。

二機を一等当選させた田辺商店は、一般用を「コンドル十二号」、二重放送用を「コンドル二十号」として商品化した。「コンドル十二号」は一台三五円だった。

一方の松下電器は「形を今少し小さく」と評価されたためか、木箱意匠图案を一般公募した。<sup>(91)</sup>「一等一名壹百圓、二等二名五拾圓宛、三等三名貳拾圓宛」で募集しており、今度は研究部ではなく企画部の担当となっている。批判を受けたので素直に改善しようとしたり、懸賞公募という方法をすぐに真似してみるあたりは、幸之助らしいと言わなければならない。この公募の結果は、『ラヂオの日本』には掲載されていないようである。この後に、松下電器は外形を改良した受信機を「当選号」として市中に売り出した。値段は四五円だった。<sup>(92)</sup>松下電器は、この当選によってラジオメーカーとして全国に名が知れ渡るようになり、以後ラジオ業界へ積極的に参入して行くのであった。

### Ⅲ 松下幸之助にとつてのラジオ

#### 1 放送内容の影響

昭和元（一九二六）年度から五（一九三〇）年度前半までの時点で、全放送中に占める教養放送の割合は平均で三七・六七%であった。<sup>(93)</sup>大阪では昭和六（一九三一）年一〇月から翌年九月までの間、教養放送の中で他の地方からの中継が二七・八%を占めていた。<sup>(94)</sup>他の地方からの中継の大半は東京からであったと思われるが、当時の大阪における全ての放送のうち、東京から中継の教養放送が占める割合は約一割

( $0.3767 \times 0.278 = 0.1047226$ ) だったと考えられる。東京中央放送局で頻繁に教養放送を行っていた高島米峰の声を、大阪にいる松下幸之助が聞くことは十分に可能だった。あるいは、スーパーヘテロダインの高性能ラジオで、東京の電波を直接受信して聞いていたのかも知れない。いずれにせよ、幸之助はラジオ業界に積極的に参入して行くことで、元から聞くことが好きであったラジオ放送に、より一層強い関心を払っていたはずである。

戦後の昭和三〇年代の証言ではあるが、幸之助はラジオ放送の中でも宗教番組が特に好きであったと何回か述べている。例えば昭和三七（一九六二）年、ラジオについて記者と対談している時、次のように言っていた。

僕はね、宗教の時間はつとめてきくようにしとるんですわ、あれだけは。けれどもね、もう少し説教かえてもらいたいと思うんですな、本当は。こら僕だけやないと思うんですよ。結局旧態依然たる説教の仕方でしょう。あれではね、はたしていいんかちゆう感じしますな。もうつまり宗教が社会生活の先達になるといふことは必要ですわな。ところが、民衆が先いってしまつて、宗教があとからついていくという感じですよ。先達ならんわけですよ。<sup>(95)</sup>

幸之助は、ラジオの宗教番組を「つとめて」聞くようにしていた。更に放送のあり方にも強い関心を持ち、「旧態依然」の説教ではなく社会の先達になるような宗教放送を望んでいた。彼は、恐らく戦前か

ら既にラジオの宗教放送に関心があったものと思われ、彼が望むような宗教とは、新仏教徒同志会のように社会の改良を積極的に目指すものだったのではないか。

メディア論の権威であるマーシャル・マクルーハンはラジオが持つ社会への影響力について、次のように述べている。

ラジオは歴史上はじめて、西洋的な文字文化とは意味も方向も全く逆であるような、エレクトロニクスによる内爆発 (implosion) を大衆に経験させたのである。同胞意識の強い人々、すなわち社会でのあり方のすべてが家族生活の延長であるような人々にとっては、ラジオはこれからも強烈な経験となり続けるであろう。高度に文字文化的な社会は、これまで長いあいだ家族生活を従として、ビジネスや政治において個人主義を主として尊重してきたが、そういう社会は革命を起こすことなく、なんとかラジオによる内爆発を吸収し中和してきた。ほんの短い、あるいは表面的な文字文化の経験しかもたない社会はそうではない。そういう社会にとつて、ラジオはまったく外爆発的 (utterly explosive) である。<sup>56)</sup>

マクルーハンによれば、文字による高度な文化を持つ社会にラジオが登場しても影響は一定の範囲で治まるが、文字文化の経験が浅い社会ではラジオの影響力は「まったく外爆発的」になるといふ。マクルーハンの分析は調査に基づくものではなく、あくまで思弁的なものであるが、この指摘は興味深い。彼は音声メディアの影響力が、それま

での文字文化の充実度によって異なると主張しているのである。

ここでマクルーハンは社会について議論しているが、同様のことは個人についても妥当するものと思われる。つまり文字による学習を十分に積んだ者がラジオを聞くのと、文字を余り読まなかった者がラジオを聞くのとでは、その影響力が大きく異なるのではないか。幸之助は尋常小学校中退であり、関西商工学校の夜間部の本科に通った時も、文字を書くのが苦手で中退したと言っている。<sup>57)</sup> 幸之助は「文字文化の経験」が浅いままラジオを聞いたのであった。つまり、幸之助こそ、ラジオから「まったく外爆発的」な影響を受けた人物ではなかったか。

幸之助とラジオの関係は、他の人と比べると、余り例のないものであったと考えられる。第一に、他の聴取者と比べると、幸之助は積極的に受信機の製造・販売に関わっていた。幸之助にとってラジオは、単なる家財道具ではなく、公私共に常に関心を払うべき対象であった。知らず識らずのうちにラジオ放送から受ける影響も、人一倍強かったと考えて良いであろう。また、昭和八（一九三三）年の段階でラジオの普及率は東京で三七%、大阪で二八%、全国ではまだ一一・二%であった（表1、図1参照）。そのほとんどは裕福な家庭であり、学識水準も比較的高かったことと想像される。学識水準が高ければ、ラジオの影響は「内爆発」に留まったはずである。第二に他のラジオ業者や放送関係者について考えると、幸之助のように尋常小学校中退の人は、この業界にはほとんどいなかったと考えられる。ラジオ放送局自体が社会教育目的で運営されていた社団法人なので、ラジオ業界には比較的高学歴の人が多かったであろう。ラジオ関係者で、ラジオから

「まったく外爆発的」な影響を受けた人はそれほど多くなかったのではないか。第三に、幸之助以前の人はラジオを聞くことができず、後の人は民放ラジオやテレビジョンにも接していた。今日で言うNHKのラジオしか聞かない人は、その後は存在しないと行って良い。幸之助がラジオ放送から何らかの影響を受けたことは間違いないだろうが、これほどまでに強い影響を受ける条件がそろった人は、日本の歴史においても珍しいと言えまいか。

他の実業家と比べて、幸之助が自らの経営理念を言葉で説明できたことは一つの特徴として広く知られている。例えば本田宗一郎と比べた場合、経営者としての実績において両者の優劣はつけがたいが、経営理念を言語で述べた人として比べると差は大きい。宗一郎は通常の経営者と同じように、自らの経営理念を言葉で理路整然と説明できなかった。十分な学校教育を受けられなかったという点では、宗一郎と幸之助の経歴は似ているが、幸之助は当時最先端の知的なメディアであったラジオに接していた一方、宗一郎が扱った商品は主にオートバイや自動車であった。両者は経営者としては甲乙つけがたいにも拘らず、理念の言語化という面で大きな差があるのは、やはり幸之助が扱った商品にラジオがあったからではないか。幸之助は、ラジオ放送から「まったく外爆発的」な影響を受けた結果、知的な言葉を多く習得することができたと考えられるのである。

幸之助の思想には、ラジオから影響を受けたことを思わせるような、いくつかの特徴がある。第一に、幸之助の言葉は分かりやすく、大衆向けであって文語的ではない。終始一貫して、幸之助は大学の講義や

伝統的宗教の説法とは違う言葉で話している。彼はラジオで聞いて印象に残った表現を使用することによって、人々の印象に残りやすい言葉を多く話したのではないか。「物心一如」「総合芸術」「人間としての成功」など、高島米峰がラジオで盛んに使っていた言葉は、放送を聞いていた幸之助の耳に残ったとしても不思議ではない。また、幸之助の言葉はその出典が分かりにくいことも、ラジオからの影響であったことと符合している。

第二に、幸之助は膨大な量の音声テープを今日に残している。PH総合研究所第一研究本部には、幸之助の講話や対談のテープが約三〇〇〇本残っているが、これだけのテープを残すということ自体も非常に珍しいことである。彼が音声による知性の保存に価値を見出したのは、彼自身が音声によって多くを学んだ影響ではないか。つまり、これらのテープの存在と、彼がラジオという音声メディアに親しんでいたことは、恐らく無関係ではないであろう。

第三に、幸之助の思想は表現だけではなく、その内容も聴覚的であって視覚的ではない。幸之助の思想を理解するのに、われわれは図表をほとんど必要としないのである。別な言葉で言えば、彼の思想はその広がりにおいて時間概念を想起する場合が多く、空間的ではない。例えば、マルクスの上部構造・下部構造などの概念やレヴィ・ストロースの構造主義などは、その思想自体が空間的であり、われわれはそれを理解する際に図表を見るか、少なくとも図表のようなものを想起する必要がある。一方、幸之助の思想は、「日々は新」とか「素直な心になろうと毎日努力して三〇年で初段になれる」など時間概念にま

つわるものが多い。彼の思想のこうした特徴は、彼自身が聴覚を刺激されて思想を形成したからではないか。

当時の日本放送協会は、「ラヂオの偉力」や「ラヂオの感化力」が絶大であると考え、最初期から「外国の放送局より日本の放送局の方が、プログラムに載る種目が遙かに多い」と自負していた。昭和六（一九三一）年当時、東京中央放送局放送部長だった矢部健次郎は「凡そラヂオの教育位贅沢な教育法は天下にない、貴族富豪でも及ばぬ。それはどんな田舎にでも当代一流の学者教授を自分の部室に招じ、さうして個人教育を受けられるからである」と言っていた。日本放送協会関東支部常務理事であった中山龍次も同じ頃「百巻の書籍を繙くよりも、偉大なる人格者の警咳に接することが如何に多くの感化を受けるか知れない」という考えで放送に携わっていた。

幸之助は尋常小学校中退であり、一見すると教育には恵まれなかったように見える。しかし彼の思想は、単に商売の経験から学んだにしては、その内容が余りにも豊富である。幸之助は、最初期からラヂオを聞いて「当代一流の学者教授」から「まったく外爆発的」な影響を受けたと考えるべきではないか。やがてラヂオメーカーのトップにたつことによって、彼は「貴族富豪でも及ばぬ」教育を受け続けたと言えるのである。

また、観点を変えれば、当時の放送内容のほとんどは、今日音声テープとして残っていないが、これらの影響を受けたものとして幸之助の思想を見ることもできる。幸之助の思想を持つ内容の豊富さこそ、昭和初期のラヂオ放送が如何に知的であったかを物語っているのでは

ないか。彼の思想は、当時のラヂオ放送の内容を凝縮して今日に伝える一級の資料であると言えよう。

## 2 「ラヂオの使命」と「産業人の使命」

マーシャル・マクルーハンは「メディアはメッセージである」という言葉を残している。メディアはその内容に拘らず、その存在自体が一つのメッセージであり、社会に一定の影響を及ぼすという考え方である。彼はラヂオの影響力と、それが無視されてきたことについて次のように述べる。

即時的な情報を伝える電気の影響力は、……、これまでわずかに認識されてこなかった。ラヂオが人々に同朋意識を取り戻させ、ファシズムにしろマルキシズムにしろ、個人主義から集団主義（collectivism）へほぼ即座に転換させる力を持つことも看過されてきたのである。このことはさまざまに解釈されるべき事柄であるが、これが今まで意識されてこなかったこと自体が驚くべきことであると云って良い。メディアに変革力があることは容易に説明がつくが、この力が当人達に意識されないということは、容易には説明できない。言うまでもないが、ラヂオ技術による精神への働きかけが多くの人々に自覚されないということは、そこに何らかの本質的な作用があることを示している。つまりストレスやショックを受けたときに生ずるような、根本的な自覚の麻痺が働いているのである。<sup>(16)</sup>

マクルーハンによると、ラジオはその放送内容に関係なく、多くの人が同じ内容を同じ時間に聞くことで、人々の同胞意識を喚起するという。ラジオはその本質として、個人主義的な社会を集団主義に変える力を持っているのである。更に彼は、ラジオには多元化や脱中央集権化の機能もあるとし、この機能はテレビジョンの方が一層強いと解釈している。

また、マクルーハンは、ラジオに限らず、メディアの影響力は一般的に意識されにくいとしている。そのなかでも、特にラジオはある種の集団主義を喚起しつつ、その影響が当人達に意識されないとしている。この指摘は興味深い。この現象は、最初期からラジオに関わっていた松下幸之助にも起こっていたと考えられる。<sup>104</sup>

日本のラジオ放送は、最初から日本の文化水準を上げるという「ラヂオの使命」が強く意識されたものであった。昭和二（一九二七）年当時、通信省電務局長であった畠山敏行はラジオの「重大なる使命」について次のように述べている。

申すまでも無く、放送事業は一国文化の発達に貢献すべき最も重大なる使命を荷ふものであります。或は瞬速なる報道を為し得る点に於て又教化を広汎に及ぼし得る点に於て、或は又、趣味、娯楽の民衆的向上を促し得る点に於て、放送事業は他の如何なる文化事業と雖、到底企及し得ざる偉大な機能を有するのであります。その運用宜しきを得ば、此の卓絶したる偉力に依て今後の国

民文化は著しき進境を見らるべきものと考へられるのであります。<sup>105</sup>

ラジオが文化の発達や教化などにおいて「重大なる使命」を有するという考えは、国の方針であり、既出のように日本放送協会も意識するところであつた。このような国家や社会に貢献する「使命」は個人主義的と言うべきではなく、集団主義的であると云つて良い。本質として集団主義を喚起する力のあるラジオ放送は、日本においては更に明白に集団主義的に意味づけられて運営されていたのである。

『ラヂオの日本』を概観すると、昭和初期において「ラヂオの使命」が特に強調された時が三回あつたことが分かる。「ラヂオの使命」は基本的な方針として常に言われていたことであつたが、この三回は特に意識されて言葉の上へのぼつたのであつた。

その一回目は、昭和六（一九三一）年九月の満州事変の時である。当時の『ラヂオの日本』の巻頭の辞は、「今回の如き事変に就ては、誰しも最大の関心と焦慮を感じる」とし、「ラヂオには、平時と云はず非常時と云はず、一貫した使命と責任とがある外、一面また、機に臨み時に応じて、或は調和調節の機関となり、又指導者先駆者たるの役割をも与へられてゐる」と言っている。陸軍省軍務局防備課長工兵大佐であつた桑原四郎も、「国防と放送事業」という論文で満州事変を意識して、「ラヂオの使命」を説いていた。当時のラジオには「非常時に於ても第一線に立つ使命」があると考えられていたのである。<sup>106</sup>

二回目は、昭和七（一九三二）年二月にラジオ受信契約者が日本で

百万人を突破した時であった。当時、ラジオ放送は許可がなければ聞けなかったもので、人数を把握することができたのである。五月一日発行の『ラヂオの日本』は巻頭の「百万突破とラジオ界の進運」で次のように述べる。

ラヂオの生活化。ラヂオの効果があらゆる生活に浸透するの日に其の百パーセントの実現は期待される。国策がラヂオ文化有終の美を期すると云ふも、放送事業の経営が公共的使命の達成に努めると云ふも、目指す所は等しく之れである。ラヂオ商工業の活躍と雖之れを度外視して真の繁栄を図るは難い。百万突破。心耳を澄せば之れに轟々たるラヂオ界総動員の大警鐘が聴かるべく、心眼を開けば之れに翩翻たるラヂオ生活化の大旗幟が見られるべきである。然り而して、協調結束邁進すべき彼岸の目標はただ一つである。即ち聴取者利益の充足を克ち得ること夫れであらねばならぬ。<sup>11)</sup>

ラジオメーカーといえども、国策や放送事業の「公共的使命」を無視して「真の繁栄」を図ることはできない。満州事変以降は、メーカーにも国策を意識することが要求されたが、百万人突破という契機は、再度それを強調することとなった。

この時は日本放送協会常務理事の小森七郎も「社会の進歩発展に依じて、放送内容を刷新向上すべきラヂオ本来の使命」<sup>12)</sup>について議論し、日本放送協会事業部長の中郷孝之助は「ラヂオの使命を果すに足るサ

ーヴキスを提供する」<sup>13)</sup>べきだと主張した。電気試験所第四部長であった楠瀬雄次郎は、ラジオ受信機を「ラヂオの使命を果すに重大な役割を演ずる」ものとしている。

三回目は昭和八（一九三三）年三月の国際連盟脱退の時であった。昭和八年『ラヂオの日本』五月号は巻頭に「非常時のラヂオ」という論文を掲げ、「今や皇国未曾有の国歩艱難時代に際し、ラヂオの使命を鑑み、我がラヂオ当事者の責務の益々重大を加ふるを察する」と述べている。小森七郎もこの時局において国民に「偉大なる精神力」を作興させることがラヂオの「第一義的活動」であるとし、「放送総動員を以て刻下の第一義的使命の達成に活動すべき」と説いていた。『ラヂオの日本』七月号の巻頭の辞は、「今や世は非常時である。ラヂオの使命は益々その重大性を加へつつあり」と言い、「聴取者側に於ては先づ聴取受信機の簡易化、経済化が最大の要求であらう。即ち感度の鋭敏、音質の良好、故障の絶無、操作の簡易、価格の低廉が翹望されてゐるのである」と述べている。松下電器が目指したのは、こうしたラジオ受信機を「使命」として製造・販売して行くことではなかったか。

これら三回のうち、幸之助において特に重要なのは、ラジオ受信契約者百万人突破の時である。昭和七（一九三二）年の二月に百万人を突破したことが三月に分かり、<sup>14)</sup>四月中に『ラヂオの日本』での特集の編集作業が進み、五月一日づけで同誌の発売となっている。つまり、昭和七年五月一日に「ラヂオの使命」は『ラヂオの日本』において一層強く主張されたのであった。松下電器が「産業人の使命」を発表し

たのは、四日後の五月五日である。幸之助がこの雑誌を読んでいなくとも、松下電器の技術者や、彼の周囲にいたラジオ関係者がこれを読んでいた可能性は高い。恐らく中尾哲二郎が懸賞募集を知ったのも、この『ラヂオの日本』だったのではないか。

また、当然のことながら、三、四月のラジオ放送で「ラヂオの使命」が盛んに説かれていたことも、容易に想像できる。「ラヂオの使命」は、方々から幸之助の耳に届いていたはずである。

マクルーハンが言うには、ラジオは個人主義的ではなく、集団主義的な価値観を喚起させ、しかも影響を受けた当人はそのことを自覚しない。また、ラジオの影響は、文字による文化の影響を余り受けていない人には「まったく外爆発的」なものとなる。しかも当時の日本のラジオ業界は、国家的使命を強く意識しており、日本という国家単位の集団を強調していた。ラジオの製造・販売に積極的に関わって行った幸之助が、「ラヂオの使命」から影響を受けなかったと考えるのは不自然である。

幸之助によれば、貧乏の克服が「実業人の使命」であり、これを増進するために物資を生産するのが「産業人の使命」であるという。彼は「松下電器の真の使命は、生産につぐ生産により、物資をして無尽蔵たらしめ、もって楽土の建設を本旨とする」と述べている。彼は製品一般について述べており、ラジオ受信機に限定していないが、「ラヂオの使命」を一般化して、「産業人の使命」に思いつくことは、さほど難しいことではない。幸之助は、松下電器が「将来ニ就テ非常ニ囑望セラレルニ至リマシタ」と述べているが、これはラジオ受信機が

一等当選したことを言外に含むと考えて良いであろう。

当時は、感度が良く、音質も良く、故障が少なく、操作が簡単で価格の安い受信機を「使命」として作るメーカーの出現が望まれていた。幸之助の「産業人の使命」はこれに呼応したものであると考えられる。これは、時期的にも「ラヂオの使命」と関係が深いことをうかがわせるものである。幸之助は、ラジオから「まったく外爆発的」な影響を受け、しかもそれを自覚せずに「産業人の使命」を述べたのではないか。

### 3 その後の松下電器とラジオ

松下電器が発売した「当選号」は性能こそ良かったものの、価格が割高だったので、当初はそれほど売れなかった。当時、松下電器のラジオ生産に関わった西村真二郎は、次のように回想している。

できましたラジオは、確かに性能面では他社に劣らないものだったのですが、悲しいかな値段が高かったのです。とにかく他社よりもいいものをつくらなければいけないということでトランスなどの部品一つ一つにいいものを使おうとすると、当然コストが高くなるというわけですね。売り出したラジオは、木製のキャビネットの上に、木製のスピーカークーの箱をのせた、現在松下電器歴史館でごらんになるタイプのうるし塗りのピカピカの商品です。しかし、性能がいくら良くても値段が高ければ売れないということ、昭和六年の後半から発売し始めて昭和八年の夏までにラジオ

に関連しての累積赤字が十万円にもなってしまいました。<sup>(12)</sup>

松下幸之助は、こうした状況に対し、担当者に「三時間ぶっ続けて小言を言う」ほど怒ったという。西村はこのエピソードを、幸之助がラジオに関して如何に「人並みはずれた熱心さ」を持っていたか分かる話として紹介している。

その後松下電器は、製品や作業工程を改善し、受信機の大量生産を可能にした。松下電器はそれ以前にも、「スーパーアイロン」を大量生産することで、大幅なコストダウンに成功し、低価格で市場を席巻したのであった。<sup>(13)</sup> 松下電器の大量生産について、愛国電球株式会社専務の内藤憲輔と七欧無線電機株式会社社長の七尾菊良は、昭和一八（一九四三）年に次のように話している。

七尾 満州事変ごろから所謂コンベアシステムで大量生産化されて来たものが、今事変でやうやく軌道に乗って来たとみられますね。尤もその途端に統制を喰ったわけですが――

内藤 コンベアシステムでは大阪の方が東京よりも一日の長があるやうだね。

七尾 それは松下が乾電池のコンベアシステムをラジオに採用し、次いで早川がこれをまねたからで、他の業者はそれに圧迫されてかなり苦しんだやうです。<sup>(14)</sup>

大量生産を標榜した松下のラジオは、一台六円五〇銭で売り出され

たことがあるという証言も見られる。「当選号」は発売当初一台四五円であり、田辺商店の「コンドル十二号」が三五円であったから破格の安さである。

更に松下電器の成功に関して、田辺商店店主の田辺綾夫と、今村電気株式会社社長の今村久義、既出の七尾菊良は昭和一八（一九四三）年に、次のように話している。

田辺 松下がラジオに乗り出す前、例の井植君が僕の処へやって来ていろんなことを研究して行った。

七尾 つまり東京から優れたものの見本を仕入れて行ってそれに更に改良を加えて自家薬籠中のものとしたわけですね。

今村 松下成功の原因はすべてそこにあるんですよ。何事によらず人よりも遅くはじめて先人の長所を採って自分のものとするといふ利好といへば利好だが、ずるいといへばずるいやり方ですね。田辺君のマグネチックスピーカーをまねて、こちらが六、七円で売ってゐるものを直ぐ二円位で売り出したり、トランスにしろ、三井のメタルセットにしろすべてその手でやられたね。<sup>(15)</sup>

今村の見解がどこまで正しいのか不明であるが、三者の言うところを汲み取れば、他社の良いところを貪欲に摂取する松下電器の手法は、この頃からあったと考えられる。幸之助は、他にもラジオに関する特許を無償で公開して業界の発展に寄与したり、自らラジオに出演するなど、さまざまな形でラジオと積極的に関わって行く。松下電器は、<sup>(16)</sup>

昭和一二（一九三七）年にはラジオを年間一十万台以上生産し、シェアは四七％になった。<sup>129</sup>

その後は戦時体制によって物資も統制となり、減産を余儀なくされる。戦後は、戦争中に軍需品を生産したこともあって、GHQから活動停止の命令を受けた。松下電器が真に「産業人の使命」を遂行できるようにするのは、活動の制限が解除された後のことであると考えられる。

#### IV 高島米峰にとってのラジオ

高島米峰は宗教放送のパイオニアであり、多くの出演者を放送局に紹介する重要な役割も果たした。彼が生涯をかけて目指したのは、仏教による世の中の改善であり、そのための仏教世界の改革である。若き日の米峰が、境野黄洋等と共に雑誌『新仏教』で論陣を張ったのもそのためであった。ラジオ放送における活動も、彼の思想と密接な関係があつたと考えられる。

日本近代仏教史研究の先駆者であつた吉田久一は雑誌『新仏教』の廃刊（大正四（一九一五）年）を「事実上の新仏教運動の終末」<sup>130</sup>としており、清沢満之等の精神主義が細く長く息を続けたことと対照的だとしてゐる。赤松徹真も、『新仏教』の廃刊を事実上新仏教運動の終焉と解釈している。<sup>131</sup>しかし米峰自身は、雑誌の廃刊によって新仏教運動まで終焉したと解釈している様子はない。むしろ社会への影響を考えたならば、ラジオに出演したことは、新仏教運動の新たな展開であ

つたと解釈すべきではないか。

新仏教運動の特徴は、「通仏教主義」と「仏教活論」による社会の改革にあつたと言える。つまり一つの宗派にとらわれず、時にはキリスト教など他の宗教とも協力することと、宗教によって現世的な幸福を目指し、政治も含めた世の改善を目指すことである。この特徴は、昭和初期の宗教放送においても、明白に意識されている。

日本放送協会の宗教放送について、同協会編になる『昭和十年ラヂオ年鑑』は次のように言っている。

我が国に於ては信仰の自由が保證され、公共的使命を有するラヂオには一宗一派に偏した伝道に亘るものは禁ぜられてゐる。従つて電波に盛られる所謂宗教放送は、各宗派に通ずる人間性の真実に徹した宗教心に訴ふるものを目安とする……<sup>132</sup>

ラジオによる宗教放送は、一つの宗派に偏らないように意識されたものだった。以前から「通仏教主義」を唱えていた新仏教徒同志会のメンバーをラジオに出演させることは、放送局から見ても方針に合ったものだったと言える。また「各宗派に通ずる人間性の真実」なるものが存在するという発想自体が、「通仏教主義」の賜であると言つて良い。かつて村上専精が唱え、新仏教徒同志会が世に広めた「通仏教主義」は、この頃には日本放送協会が明白に採用していたのである。

仏教が超越的世界より現世において有意義であるという考えも、日本放送協会が意識したところであつた。『昭和十年ラヂオ年鑑』は、

宗教放送の意義について、次のように述べている。

働けど働けど生計の楽にならない農村、ジャズに踊るネオンの灯影、放浪者の群を見る都会、富むと貧しきと生活の相は異にしてゐるが、人々は皆悩んでゐる。生活苦からではない。ただ漠とした焦燥と不安に駆られた儂なさ、頼りなさの孤独感である。懐れの物質文化は巷に華と咲いてゐるが魂を失へる放浪者の孤独感を消す由もない。何か頼るべき力が得たい、空虚な心に充実感が欲しい。物質への欲望で心眼を盲した民衆は今や齊しく「安心と悟道」に憧れてゐるが、嘗ての魂の安息所たりし宗教の殿堂は奥深く香煙に隠れて民衆への扉を閉ざしてゐる。

この時暁の鐘を撞くラヂオの聖典講義、名僧知識の打ち鳴らす魂の警鐘は確かに救済であつたに違ひない。げにラヂオは時代文化の華であり、もろもろの美はしきもの、善きもの、真なるものを惜しみなく皆人に与へてゐる。嘗て黴臭い書齋に、貴族趣味のサロンに閉されてゐた知識の宝庫は大空に開け放たれた。然し迷へる民衆の心魂を揺り動かす聖なるものに恵まれる事が少かつたのである。<sup>135</sup>

日本放送協会は、「ラヂオの使命」に則り、宗教放送も人々に「安心と悟道」を与えるものだと考えていた。人々の現世的救済を目指すこの思想は、井上円了が唱え、新仏教徒同志会が世に広めた「仏教活論」の思想と同じである。

米峰は、かつてこの二つの主義を唱えたため、旧仏教側から「悪魔の如く恐れられ、外道の如く嫌はれた」と言つていた。<sup>134</sup> 明治時代において、全ての宗派を同じ趣旨であると解釈したり、仏教によつて現世的救済を目指すことは、一種の危険思想であつた。しかし、昭和に入れば、「悪魔」の思想はもはや常識となり、「外道」の主張は民衆が渴望するようになる。新仏教の思想は、公共放送が主義として積極的に標榜するまでになつたのである。

ラヂオによる宗教放送は、当時の日本に宗教復興の気運を作つた。日本放送協会も「近時宗教復興の気運が云々され、しかもそれがラヂオに負ふところ大なるものであるとさへ言はれてゐる」と自負してゐた。<sup>135</sup> 新仏教徒同志会の理想は、昭和初期において事実上ラヂオと共にあつたと考えて良い。また見方を変えれば、新仏教徒同志会による新仏教運動がなければ、昭和初期の宗教放送も存在しなかつたかも知れない。無僧・無寺院・無儀式主義を唱え、自由討究主義による信仰を掲げた新仏教運動は、ラヂオによる宗教放送の先達だつたのである。<sup>136</sup>

実験放送の頃からラヂオに関わつていた下村海南は、米峰の死後、自身の考え方が米峰と全く同じであつたと証言している。<sup>137</sup> 宗教に関する考え方も、恐らく共感してゐたものと思われる。初期のラヂオの歩み自体が、米峰の思想と深い関わりがあつたことを示唆している証言である。

つまり、昭和初期の宗教放送は、事実上の新仏教運動を含んでゐたのではないか。雑誌『新仏教』の時代が第一次新仏教運動であるとするれば、米峰や同志会メンバーによる頻繁なラヂオ出演は第二次新仏教

運動であったと考えられるのである。社会に与えた影響を考えれば、むしろ第一次の運動よりも、第二次の方が強力な運動だったかも知れない。

この思想運動から、誰よりも強い感化を受けたのが、ラジオ受信機の製造・販売に「人並みはずれた熱心さ」を持っていた松下幸之助だったのではないか。ラジオの製造方法において他社のものを貪欲に取り入れた幸之助であったが、ラジオ放送からも思想を貪欲に摂取したことは間違いない。宗教放送が好きであった幸之助は、ラジオの宗教放送を開拓した米峰から多大な影響を受けたと考えられるのである。

また、精神主義の影響力が長く続いた理由はさまざまであろうが、暁烏敏の本がよく売れたことは重要な事実であろう。暁烏もラジオ放送に何度か出演している<sup>13)</sup>ので、ラジオによって彼の本が売れたことは間違いない。どのような経緯で暁烏がラジオに出演するようになったのかは今後の調査を要するが、米峰が紹介した可能性は大きい。もしそうだとすれば、精神主義が続いた一つの要因として、新仏教徒同志会が精力的な活動を続けていたことを指摘するべきではないか。昭和初期のラジオ放送自体が新仏教主義に則ったものだったので、新仏教があつてこそその精神主義だった可能性も否定できない。第二次新仏教運動は、ラジオを通じて仏教復興の気運を作り、精神主義など他の仏教運動も支えるだけの力を持っていたと考えられるのである。

終戦後の昭和二〇（一九四五）八月三十一日、米峰はラジオに出演し、「新日本」を生み出すべきだと国民に訴えた<sup>14)</sup>。彼はこの時、一七条の憲法を引用し、聖徳太子の思想によって国民を励ましている。昭和二

二（一九四七）年、一月二五日の座談会に出席したのが最後のラジオ出演だったと言われている<sup>15)</sup>。米峰は、昭和二四（一九四九）年一〇月二五日に七五歳でこの世を去った。死去の知らせを聞いて浄土真宗本願寺派の大谷光照法主は、遺族に「超絶」の二字を書にして贈った<sup>16)</sup>。

## V 結論と展望

高島米峰は、最初期からラジオに出演し、宮家の冠婚葬祭放送を担当するほど日本放送協会から信頼されていた人物であった。また、出演者の斡旋を行ない、新仏教徒同志会のメンバーも多数出演させていた。当時の宗教放送自体が、新仏教と同じ主義で放送されていたことを考えると、昭和初期の宗教放送は第二次新仏教運動を包含していたはずである。

松下幸之助は、最初期からラジオに関心を持ち、やがて積極的にラジオ受信機の製造・販売に乗り出して行った。マクルーハンは、文字による文化の影響が浅い人はラジオから多大な影響を受けると主張するが、宗教放送が好きだった幸之助は、米峰の宗教放送から人一倍強い影響を受けたのではないか。また、当時の日本放送協会は「産業人の使命」を強調していたが、幸之助はこの思想に刺激されて、「産業

以上が本稿の分析であるが、最後に今後の課題を列挙して稿を終えたい。まず、幸之助はラジオ放送によって米峰の影響を受けたとしても、ラジオ以前に新仏教の感化は受けていないのだろうか。明治末期

や大正期の宗教界の他の活動も研究に値する。また、新仏教徒同志会以外の宗教家によるラジオ放送からも、幸之助が影響を受けた可能性はある。友松円諦の「法句経講義」は昭和初期において人気を博した宗教放送であったが、友松も米峰の影響を受けつつ独自に宗教運動を展開した仏教思想家であった。椎尾弁匡の共生運動も、この時期の宗教運動として調べる必要がある。また幸之助は、宗教以外の放送においても影響を受けた可能性はあるので、他の著名なラジオ出演者は看過できない。本稿では主にラジオについて議論したが、幸之助による「水道哲学」の実践は「スーパードアイロン」の頃からあったと思われるので、時代を遡って電気業界の情勢を調査することもまた有意義であろう。

#### 【注】

- (1) ラジオ放送史に関して、あまり多くの先行研究を見つけることはできなかった。本稿が参考にしたものは、竹山昭子『ラジオの時代―ラジオは茶の間の主役だった―』（世界思想社、二〇〇二年）、NHK放送文化研究所監修『放送の20世紀 ラジオからテレビ、そして多メディアへ』（日本放送協会、二〇〇二年）、日本放送協会編集・発行『20世紀放送史』上巻（二〇〇一年）など。竹山は、録音が残っていない戦前のラジオの放送内容について調査するために、当時の紙媒体の情報を参照したと述べているが（前掲『ラジオの時代』八頁）、本稿の方法も竹山から示唆を受けたものである。
- (2) P H P総合研究所研究本部「松下幸之助発言集」編纂室編『松下幸之助発言集』（P H P研究所、一九九一～三年）第11卷一二九頁。同前同巻一三二頁。
- (3) 高島米峰の兄弟の孫にあたる高嶋正士氏によると、本来「高嶋」が正しい表記だったのに、何らかの理由で「高島」になっていたのではないかとのことである。本稿では、書誌学的表記を重んじ、暫定的に本文のような判断をした。昭和一一（一九三六）年以前としては、『店頭禪』（日月社、一九一四年）の背表紙に「高嶋」とあるが、この本も奥付や扉（タイトルページ）、本文の中での表記は「高島」である。以降のものとしては、『権兵衛と鳥』（高山書院、一九四〇年）が、「はしがき」で「高嶋」になっており、表紙と背表紙、奥付で「高島」になっている。
- (4) 越野宗太郎編・発行『東京放送局沿革史』（一九二八年）二四八頁。『毎日新聞』一九六三年九月一日「放送百話」。
- (5) 相良忠道編『大阪放送局沿革史』（広江恭造発行、一九三四年）五頁。同前一四七頁。
- (6) 高嶋米峰「米峰回顧談」（学風書院、一九五一年）一四六頁。
- (7) 高嶋米峰「信ずる力」（明治書院、一九三六年）一五三頁。一四四～一五三頁に、放送の全文が掲載されている。また米峰とラジオの関わりは、前掲『米峰回顧談』一四六～一六七頁に詳しい。更に大正一四（一九二五）年一月一日にもラジオに出演したようである（『日刊ラヂオ新聞』一九二五年一月一日）。
- (8) 大日本雄弁会編『高島米峰氏大演説集』（大日本雄弁会、一九二七

- (11) 年)一九九〇二二一頁に全文掲載。
- (12) 前掲、『東京放送局沿革史』二〇三頁、日本ラヂオ協会発行『ラヂオの日本』二卷(一九二六年)四四八頁。同前同卷五二九頁では、三月二二日となっている。
- (13) 高島米峰『人生小観』(丙午出版社、一九二六年)一四五～一九〇頁に全文掲載。「はしがき」の二頁に「東京放送局に於ける、放送講演の速記録」とある。
- (14) 前掲、『高島米峰氏大演説集』一四四～一六五頁に全文掲載。
- (15) 河澄清編纂・発行『日本放送史』(一九五一年)四五四頁。
- (16) 前掲、『米峰回顧談』一五七～八頁。  
後に松下電器が門真に進出する時、大阪市から見ても鬼門の方角であるから不吉だとする反対意見があった。幸之助はこれを退け、京阪沿線の発展を願ひ、「諸君願わくは迷信を打破し、沿線開拓の先駆者たるべく努力していただきたい」(前掲、『松下幸之助発言集』第29巻六一頁)と社員に訴えている。「迷信の打破」は井上円了のライフワークであったが、これを引き継いだ米峰のラジオ啓蒙も頻繁に「迷信の打破」を訴えていたので、松下電器の門真移転を精神面で助けたと解釈できる。
- (17) 松田儀一郎編纂・発行『日本放送協会史』(一九三九年)三一六～三一八頁。
- (18) 前掲、『日本放送協会史』一八七頁。
- (19) 日本放送協会編『昭和六年ラヂオ年鑑』(誠文堂)三〇八頁。
- (20) 前掲、『ラヂオの日本』二卷三七二頁。
- (21) 同前三卷(一九二六年)二二七頁。
- (22) 同前同卷四〇三頁。
- (23) 当時、ラヂオを贅沢品と見なして、輸入ラヂオに一〇〇%の関税をかけようという動きがあった(前掲、『東京放送局沿革史』六九頁)。出演を嫌がる人も少なくなかったことは、前掲、『日本放送協会史』一九五頁。
- (24) 前掲、『ラヂオの日本』五卷(一九二七年)三四四頁。
- (25) 前掲、『米峰回顧談』一五二頁。
- (26) 前掲、『日本放送史』四五五頁。
- (27) 前掲、『ラヂオの日本』九卷(一九二九年)一六二頁。
- (28) 前掲、『大阪放送局沿革史』二五～二六頁。
- (29) 同前一四七頁。
- (30) 前掲、『東京放送局沿革史』一一二頁。前掲、『大阪放送局沿革史』二二二頁にも掲載。
- (31) 前掲、『ラヂオの日本』五卷四〇四頁。
- (32) 同前一〇卷(一九三〇年)三一頁。
- (33) 同前一二卷(一九三〇年)四六六頁。
- (34) 同前二卷二二一頁では、日本ラヂオ協会の言葉であるが「放送無線電話の使命」とか「ラヂオの使命」(二二二頁)という表現を見ることがができる。
- (35) 昭和六(一九三二)年には、「ラヂオは、今や、成人の域に達した」と考えられていた(前掲、『ラヂオの日本』二卷(一九三一年)一九七頁)。

(37) 前掲、『日刊ラヂオ新聞』一九二八年九月二八日。

(38) 前掲、『信ずる力』二二～三四頁。

(39) 秩父宮を偲ぶ会発行『秩父宮雍仁親王』（一九七〇年）によると、新仏教徒同志会のメンバーであった高島平三郎は秩父宮に進講したことがあった（同書、二六六頁）。松下幸之助は秩父宮を偲ぶ会のメンバーであり（九八〇頁）、松下電器も偲ぶ会の協力団体であった（九八一頁）。

(40) 前掲、『日刊ラヂオ新聞』一九二九年二月三日。

(41) 前掲、『信ずる力』二～一七頁。

(42) 前掲、『日刊ラヂオ新聞』一九二九年二月三日。

(43) 前掲、『信ずる力』八頁。

(44) その他、久邇宮との思い出は、前掲、『米峰回顧談』八八～九〇頁でも語っている。米峰はその後聖徳太子についてラジオで講演した。例えば、昭和一一（一九三六）年一月五日「宗教と宗教のやうなもの」でも聖徳太子について言及し（高嶋米峰『同じ方向へ』（明治書院、一九三七年）一六三頁）、終戦を迎えた昭和二〇（一九四五）年八月二二日の「連合軍を迎えて」という放送でも一七条の憲法を引き合いに出している（高嶋米峰『心の糧』（金尾文淵堂、一九四六年）八〇～八一頁）。一方、幸之助は池田大作との対談で、尊敬する人物として聖徳太子の名を挙げ、その知識は本で読んだものではないとしている（松下幸之助、池田大作『人生問答』上（潮出版社、一九七五年）一三二～一三三頁）。聖徳太子の名誉回復運動に米峰が果たした役割は大きいが、幸之

助の聖徳太子観と合わせて別に論じる予定である。

(45) 前掲、『米峰回顧談』一四七頁。

(46) 高嶋米峰『高嶋米峰自叙伝』（学風書院、一九五〇年）「追憶」一五七頁。年末における米峰の講演は、昭和五（一九三〇）年の二月三〇日に確認できる（前掲、『日刊ラヂオ新聞』一九三〇年二月三〇日）。

(47) 前掲、『米峰回顧談』一五一頁。

(48) 前掲、『昭和七年ラヂオ年鑑』三二六頁。

(49) 同前三三一頁。

(50) 前掲、『昭和八年ラヂオ年鑑』二二三頁。

(51) 新仏教徒同志会については、愚論「明治・大正期の新仏教運動と松下幸之助——境野黄洋と高嶋米峰の思想を中心に」（『論叢 松下幸之助』第3号、PHP総合研究所、二〇〇五年）参照。

(52) 前掲、『日刊ラヂオ新聞』一九二五年二月二七日。

(53) 前掲、『昭和八年ラヂオ年鑑』一八七頁。

(54) 前掲、『昭和九年ラヂオ年鑑』一三四頁、四七八頁。

(55) 前掲、『昭和十年ラヂオ年鑑』一二六頁。単行本は加藤咄堂『放送業根譚講話』（大東出版社、一九三四年）。

(56) 前掲、『日刊ラヂオ新聞』一九二五年一〇月五日、十一月一日。高島平三郎は東洋大学で心理学を教えていたが、米峰と同じ姓だったので、よく間違えられて困ったという（前掲、『米峰回顧談』五三～六二頁）。「米峰は平三郎にあらず」。平成一七（二〇〇五）年七月現在、国立国会図書館のNDL-OPACすらも、米峰と平三郎

- を同一人物として書誌情報を掲載している。
- (57) 前掲、『昭和八年ラヂオ年鑑』二四九頁。
- (58) 前掲、『昭和九年ラヂオ年鑑』一三八頁。
- (59) 前掲、『日刊ラジオ新聞』一九二五年一〇月二六日。
- (60) 同前一九三二年二月一八日。
- (61) その他、宗教放送で一時代を築いた人物として友松円諦を挙げることができる。友松もラジオ放送の前から米峰と懇意にしており(前掲、『高嶋米峰自叙伝』「追憶」二三七頁)、米峰が放送協会に紹介した可能性は高い。友松は幸之助による最初期PHP運動にも関係しているので、機会を改めて論じたい。また椎尾弁匠も、米峰と知り合いで、なおかつラジオに出演していた。椎尾のラジオ出演は、前掲、『日刊ラジオ新聞』一九二五年九月二七日など。
- (62) 前掲、『ラヂオの日本』三卷三四〇頁。また「関東八州鉱石化計画」というものもあった。前掲、『東京放送局沿革史』一〇五頁参照。
- (63) 前掲、『ラヂオの日本』六卷(一九二八年)一四四頁。
- (64) 同前同卷一六二頁。
- (65) 同前同卷四九二頁。
- (66) 松下幸之助『私の行き方考え方』(PHP研究所、一九八六年)二五一―二五二頁。
- (67) 前掲、『ラヂオの日本』六卷四九二頁。日本放送協会編集・発行『20世紀放送史年表』(二〇〇一年)二二六頁。
- (68) 同前三卷五〇頁。
- (69) 同前五卷二五五頁、六卷三一五頁。
- (70) 同前九卷四七五頁。
- (71) 同前五卷二四〇頁。
- (72) 同前一二巻巻頭の広告。
- (73) 前掲、『20世紀放送史年表』二七頁。
- (74) 前掲、『ラヂオの日本』一三卷(一九三二年)一〇四頁。
- (75) 同前同卷二八七頁。「ラヂオ風景」が何を指すのかは不明である。
- (76) 同前一二巻四四八頁。
- (77) 同前一二巻一三九頁。
- (78) 同前同卷一三四―一五三頁。
- (79) 前掲、『昭和八年ラヂオ年鑑』五三六頁。
- (80) 前掲、『私の行き方考え方』二五一―二六一頁。
- (81) ラジオ事業部50年史編集委員会編『飛躍への創造―ラジオ事業部50年のあゆみ』松下電器産業株式会社ラジオ事業部、一九八一年)一頁。中尾は「松下相談役」と言っているが、これは回顧している当時の幸之助の肩書きで、懸賞募集の際、幸之助は「松下電器製作所」の「所主」だった。
- (82) 前掲、『ラヂオの日本』一三卷一四六頁。
- (83) 同前同卷二四五頁。
- (84) 前掲、『昭和七年ラヂオ年鑑』四一七頁。西村は一等当選の賞金を「200円か300円」(前掲、『飛躍への創造』一二頁)と回顧しているが、『昭和七年ラヂオ年鑑』は三五〇円としている。
- (85) 前掲、『ラヂオの日本』一三卷四〇七―四一六頁。
- (86) 同前同卷四一三頁。

- (87) 前掲、『飛躍への創造』一二頁。
- (88) 前掲、『ラヂオの日本』一四卷(一九三二年)二七頁。
- (89) 同前同卷一四〇〜一四一頁。論文は、落選したもう一方の試作機については、何も語っていない。落選の原因や、どのような試作機だったのかもまったく不明である。
- (90) 前掲、『日刊ラヂオ新聞』昭和七(一九三二)年六月一〇日七面に広告が掲載されている。
- (91) 前掲、『ラヂオの日本』一五卷(一九三二年)四頁。
- (92) 松下電器産業株式会社発行『松下電器五十年の略史』(非売品・P H P 総合研究所第一研究本部所蔵、一九六八年)八五頁。その他、松下電器産業株式会社発行『社史資料』No.6(非売品・P H P 総合研究所第一研究本部所蔵、一九六二年)四八頁では、三五〜四〇円だったという証言がある。
- (93) 前掲、『昭和六年ラヂオ年鑑』三〇八〜三〇九頁。
- (94) 前掲、『昭和八年ラヂオ年鑑』一七〇頁。
- (95) 『速記録』327巻七五〜六頁(P H P 総合研究所第一研究本部所蔵)。他に前掲、『松下幸之助発言集』第17巻一〇〇頁でも、「ぼくは早朝のラヂオはよく聴くんです。朝日放送の宗教の時間なんかもつとめて聴くようにしてます」と言っている(昭和三七(一九六二)年の証言)。
- (96) Marshall McLuhan, *Understanding Media: The Extensions of Man*, The New American Library, 1964, pp.262. 邦訳は栗原祐・河本仲聖訳『メディア論』(みすず書房、一九八七年)。
- (97) 前掲、『私の行き方考え方』五四頁。
- (98) 音声テープは約三〇〇本残っているが、数え方で端数は増減する。
- (99) 前掲、『ラヂオの日本』一〇巻三四頁。
- (100) 同前二巻二八頁。
- (101) 同前一二巻一一頁。
- (102) 同前一〇巻三四頁。正確には昭和五(一九三〇)年の発言。
- (103) Marshall McLuhan, *op.cit.*, pp.265.
- (104) 幸之助の妻である松下むめのが書いた『難儀もまた楽し』(P H P 研究所、一九九四年)には、新聞やテレビに関する言及はあるが、「ラヂオ」は一語もない。もちろんのこと、松下家は毎日のようにラヂオを聞いていたはずである。ラヂオは松下家において空気のようにとけ込み、その存在すらも気につかないものだったのだろうか。
- (105) 前掲、『ラヂオの日本』五巻八五頁。
- (106) 同前一四巻一六九頁。
- (107) 同前同巻四一六頁。
- (108) 同前一五巻五七頁。
- (109) 当時において、幸之助が満州事変について何か述べている様子は確認されない。後に松下電器は満州に進出するが、この時点では満州に興味が薄かったのか、今日資料が確認できないだけなのかは不明である。
- (110) 当時、無届聴取者は取り締まりの対象であった。前掲、『ラヂオ

- の日本』一六卷（一九三三年）四九一頁参照。
- (111) 前掲、『ラヂオの日本』一四卷三三三頁。
- (112) 同前同卷三三三頁。
- (113) 同前同卷三三五頁。
- (114) 同前同卷三四四頁。
- (115) 同前一六卷三四五頁。
- (116) 同前同卷三四七頁。
- (117) 同前一七卷（一九三三年）一頁。
- (118) 同年三月一五日には大阪中央公会堂で百万突破記念演奏会が開かれてラジオで中継され（同前一四卷四〇二頁）、三月二七日にも記念として神戸旧関西学院講堂で演奏会が開催され、放送された（同前同卷四〇三頁）。その他にも百万突破記念放送が三月二〇日にあつたようである（同前一五卷四六〇頁）。「百万突破」は文字通りのお祭り騒ぎだったことがうかがえる。
- (119) 前掲、『私の行き方考え方』二九六頁。
- (120) 同前二九八頁。
- (121) 幸之助は、天理教の施設を見て、「宗教人の使命」を考え、そこから「産業人の使命」を考えるに至つたと説明している（前掲、『私の行き方考え方』二七八―二九二頁）。彼が天理教の施設を見て感銘を受けたことは事実であろうが、『おふでさき』など天理教の重要な書を見ても、「宗教人の使命」に該当する概念が強調されている様子はない。天理教は、即物的かつ社会的な議論に弱い傾向がある。一方、「産業人の使命」は属性として即物的かつ社会的である。天理教の教えから「産業人の使命」までは、本質的にかなりの距離があることは否定できないであろう。マクルーハンが言うように、幸之助はラジオから影響を受けたことを、本当に全く自覚していなかったのかも知れない。
- (122) P H P 研究所編集・発行『P H P セミナール特別講話集 松下相談役に学ぶもの・第五集』（非売品・P H P 総合研究所第一研究本部所蔵、一九八一年）六三頁。
- (123) 前掲、『私の行き方考え方』二〇六―二〇八頁。
- (124) 岩間政雄編輯・発行『ラジオ産業廿年史』（一九四三年）一四四頁。昭和一八（一九四三）年五月三日、ラジオ関係者の座談会より。
- (125) 同前二四三頁。
- (126) 同前一四五頁。
- (127) 前掲、『松下幸之助発言集』第28巻、二九九頁。
- (128) 後藤清一『叱り叱られの記』（日本実業出版社、一九七二年）七五―七六頁。
- (129) 前掲、松下電器産業株式会社発行『社史資料』No.7（一九六二年）五三頁。
- (130) 吉田久一『吉田久一著作集4 日本近代仏教史研究』川島書店、一九九二年、三三九頁。
- (131) 赤松徹真「解説 新仏教運動とその歴史的な性格」（二葉憲香監修『新仏教』論説集下巻）（永田文昌堂、一九八〇年）所収、七一頁。
- (132) 前掲、『昭和十年ラヂオ年鑑』一二二頁。

- (133) 同前一二五頁。
- (134) 前掲、『高嶋米峰自叙伝』三五頁。
- (135) 前掲、『昭和十年ラヂオ年鑑』八〇頁。
- (136) 新仏教運動の思想については、前掲、「明治・大正期の新仏教運動と松下幸之助——境野黄洋と高嶋米峰の思想を中心に」を参照。
- (137) 米峰の死に際して下村が寄せた一文は、前掲、『高嶋米峰自叙伝』「序」一一～一三頁。下村が最初期からラヂオに関わっていたことは、前掲、『ラヂオの日本』一四卷三五～三五二頁参照。
- (138) 前掲、『昭和八年ラヂオ年鑑』二二二頁、『昭和十年ラヂオ年鑑』一二六頁など。
- (139) 前掲、『心の糧』七七～八三頁。この「連合軍の進駐を迎へて」という文章は、凡例に「主として一般聴取者に呼びかけたるもの」とあるので、ラヂオ演説の速記録であると思われる。
- (140) 前掲、『高嶋米峰自叙伝』二五八頁。
- (141) 高嶋清・高嶋雄三郎・高嶋四郎『高嶋米峰小誌』（非売品・亡父高嶋米峰廿七回忌生誕百年記念出版、一九七五年）二二頁。既出の高嶋正士氏によれば、「超絶」は書であったとのことである。

※資料の引用に際して、一部の旧漢字を現行漢字に改め、一部句読点を変更してある。

(さかもと・しんいち P H P 総合研究所第一研究本部松下理念研究部研究員)